

## 【実践報告】

## 地域交流の場「信大茂菅ふるさと農場」が教員養成に及ぼした効果

長田侑里子・土井 進

## 1. 研究の目的

筆者は、慶應義塾大学環境情報学部の学生時代に「信大茂菅ふるさと農場」（以下「農場」と略す）に出会った。大学で「高齢者の知識や経験を伝える世代間交流」や「地域貢献への大学機関の役割」といった研究テーマについて、インターネットで検索していた2011年（平成23年）5月に、『地域ブランド研究』vol. 4に掲載された土井進（2008）「信大茂菅ふるさと農場」10年目の「人づくり」戦略－「信大茂菅農業義塾」の開墾－」に遭遇した。これがご縁となって3年生と4年生の2年間、副農場長として「農場」の活動に参画する機会を得た。

本研究は、信州大学教育学部の学生が主体となって運営している「農場」が地域交流の場となることによって、教員養成にどのような効果をもたらしているかを究明することを目的としている。本研究において「地域交流の場」とは、「農場」において学生が近隣地域の住民、JAながの営農指導員、子どもとその保護者の4世代と協働して農作業に取り組むことを指している。

## 2. 研究の方法

本研究は、「農場」の活動に参加している信州大学教育学部の学生60人を対象に、筆者（長田）が作成したアンケート調査（2012年12月15日実施）に基づいて考察する。また、学生へのインタビュー調査（2011年8月6日～2012年12月15日）、地域協力者へのインタ

ビュー調査（2011年8月6日）、そして保護者を対象としたインタビュー調査（2012年12月15日）を基に考察する。

学生60人の性別は、女性37人（61.7%）、男性23人（38.3%）となっている。また、学年別属性は、1年生11人（18.33%）、2年生18人（30.00%）、3年生17人（28.33%）、4年生14人（23.33%）である。一方、出身地域別属性は、長野県内45人（75.0%）、長野県外15人（25.0%）である。また、「農場」での活動は月に1回、年間11回実施されているが、年に何回ほど参加しているかを聞いたところ、1～3回（25.42%）、4～6回（15.25%）、7～9回（15.25%）、ほとんど毎回（44.07%）であった。

## 3. 「信大茂菅ふるさと農場」の開墾と学生主体の運営

「農場」は、2000年度（平成12年度）にJAながのと長野市茂菅地区農家林部信造・幸子夫妻のご協力を得て開設された。学生たちが鍬と鎌、鋸、鉋を用いて、6年間放置された荒廃地を教育用の水田4a、畑8aとして開墾した。この「農場」は教育学部から国道406号を徒歩で20分の裾花川沿いに位置しているので、学生が自転車で参加できる。また、農作業体験を地域社会の子どもたちと一緒に行うためには、保護者用の駐車場を確保することが必須条件である。幸いなことに国道に架かる茂菅大橋の下は、25台を止めることのできる絶好の駐車場となった。

教員養成を本務とする教育学部が「農場」

に着目したのは一体なぜであったか。休業土曜日に地域社会の子どもたちを大学に招いて、様々な体験活動を行う「信大YOU遊サタデー」という授業外活動が開始されたのが1994年（平成6年）であった。この活動には1回に200名ほどの子どもと70名～100名の学生が参加する。この学生集団は教育篤志者であると言ってよい。子どもたちの笑顔に出会うために学生たちは寸暇を割いて教材開発に取り組む。当日の朝を迎えると1時間前には、正門でのお迎え係、駐車場係、受付係、そして警備係などの任務に就く。子どもたちを「迎え3分に送り7分」の精神で、一人ひとりの子どもたちを正門まで出て迎え、閉会式が終わると正門まで出て見送る。その後、会場の片付け、掃除を済ませると活動のリフレクションが行われる。ひと時も体の休まる間が無い状況の中で、生協での昼食が子どもたちであふれていたために、食べ損なう学生リーダーが出てしまった。体力に自信のある学生たちではあったが、流石にへたり込む者が出てしまった。この必死な姿に筆者は学生に無理をさせてしまったと猛省した。それで次回からは、クッキング隊という係を配置して昼食を摂る間もない学生リーダーに「お結び」を用意することにした。無償で子どもたちのために奮闘努力している学生リーダーに「お結び」を差し入れすることは、「信大YOU遊サタデー」の活動を無事故で推進する上で何よりの原動力となった。こうして「YOU遊」の実践を継続していくために、学生のエネルギー源となるお米を自前で確保したいと考えるようになった。

もう一つの「農場」開拓の理由は、大学キャンパスで年3回、6年間にわたって実施され地域社会から好評を得てきた「信大YOU遊サタデー」であったが、そのイベント的性格のために、学生にとって労多くして

1日だけであつという間に終わってしまうということが問題であった。この課題を打破して通年にわたる継続的な活動へと脱皮するために、子どもを大学に集めるのではなく、学生の方が地域社会に出ていこうと発想を転換した。そして、地域社会のなかで荒地地を借り受けて学生が子どもたちと一緒に、「土づくり」に取り組むことを通して、教員養成の本務である「人づくり」を実現したいと志したのである。

「農場」は、立候補によって選ばれた学生3役（農場長、副農場長）とJAながの営農指導員、林部信造・幸子夫妻、そして筆者（土井）の合議によって運営されている授業外活動である。学生は、主体的・自主的な判断によって「農場」に参加しており、単位にもならないし、アルバイトにもならない。にもかかわらず正副農場長を志願する学生が毎年現れ、14年間継続されてきた。（表1）

「農場」は授業科目としても活用されている。「生活科指導法基礎」A・B（前期、各70名）、「生活科指導法基礎」C・D（後期、各70名）、「総合演習」（20名）である。本研究において対象とした60名の学生は、「農場」に主体的・自主的に参加している篤志者である。

## 4. 学生が「農場」の活動に参加する動機と満足度

### 4.1 動機

まず学生が「農場」の活動に参加する動機を見ていく。「農場」に参加した理由をお伺いします。下記の選択肢をそれぞれ5段階で評価してください。」

（強い） 5 4 3 2 1（弱い）

この質問に対する回答の平均値は表2の通りであった。

学生が「農場」に参加する最大の動機は

表1 歴代の正副農場長と参加学生数・各期の活動の特色

期	平成 年度	農場長・副農場長	学生数	各期の活動の特色
1	12	杉山雅幸（野外4） 榊原研太（理科4） 千野加世子（生活3） 中澤典子（国語4）	26人	6年間放棄された荒廃地には、雑木が繁り地面には蔓や木の根が縦横に張っていた。ここを開墾し畑作業においてグループ制とオーナー制を併用し、作業効率の比較考察を行った。
2	13	西澤俊輔（理数3） 原山美樹（生活2） 花村尚美（理数2）	35人	秋の田起こしが終わった水田に蓮華の種を播いた。春にきれいな花が咲き、蓮華畑で子どもたちと遊んだ。 田んぼで子どもたちと草花遊びをした。
3	14	那須紋子（生活3） 高橋和之（理数3）	32人	田植えの終わった水田に、佐久で購入したフナの稚魚4,500匹を放流、稲刈りのとき約200匹を捕獲した。泥んこ遊び
4	15	北川伸尚（障害児3） 宇良知子（生活3）	26人	茂菅米で餅つきをした、茂菅で収穫した完全無農薬の新米でお寿司パーティーを楽しんだ。
5	16	神林彩井（生活3） 吉澤あすか（言語3）	38人	冬におはぎ作り。水田の畦に植えた大豆を収穫し、きなこにすりつぶしておはぎをいただいた。
6	17	松井泉樹（生活3） 川端智子（教育3） 矢竹喜美子（理数3）	31人	ジャンボかぼちゃが2個大きく実った。第4回YOU遊フェスティバルの会場入り口に入場門として置いた。終了後は細かく砕いて堆肥箱に入れ、堆肥として再利用した。
7	18	平林照世（言語教3） 川辺裕作（教育3）	42人	五穀豊穡を願って実際に栽培することにした。米、麦、豆、粟、黍の五穀を栽培した。初めて落花生を栽培し、名前のいわれを実感することができた。
8	19	洞出直美（教育3） 上田雄介（理数3）	43人	背中に「八代目茂菅組」と書かれた橙色のつなぎを着て、学生スタッフが勢ぞろいして作業した。
9	20	宮川はるな（言語3） 中川 茜（生活3） 原 卓也（理数3）	40人	田植えの終わった水田にザリガニを20匹放流し、子どもたちにザリガニつりをさせた。ザリガニはいつの間にかいなくなってしまう。
10	21	飯島理沙（理科3） 鈴木祐香（理科3） 藤田裕介（社会3）	52人	農業を通して物事を素直に感じることができる心を養うことを活動目標とした。平成21年10月10日に茂菅農場10周年記念講演会と祝賀会開催。講師は林部信造氏であった。
11	22	三石梨沙（理科3） 土屋克明（数学3） 松井 遥（理科3）	53人	裾花川での川遊び、すいか割り。ひょうたんの栽培。 JA長野中央会から「虹の懸け橋」賞を受賞。皆様に感謝。 ひょうたんに色づけしてキーホルダーを作った。
12	23	井出愛香（実践3） 菊地智香（理数3） 澗口歩美（理数3） 長田侑里子（慶応3）	48人	フナの放流。ソバの栽培とソバクレープ作り。 鬼のお面を作りと落花生を使った豆まき。平成24年2月9日、長野市若里市民文化ホールで「子どもと学生の笑顔輝く茂菅農場」について正副農場長が事例発表。
13	24	手塚亮介（理数3） 井上甲斐（芸術3） 遠山芽衣（生活3） 長田侑里子（慶応4）	79人	農作業に英語活動を取り入れた。ダルトン・コリン先生のご指導を受け、「信大茂菅Farming Village」と改称し、新しい看板を併設した。
14	25	永原正裕（特支3） 飯島香純（実3） 那須絢太郎（理数3）	64人	古代米を植え付け、田んぼに「モスゲ」の文字を書く。10月13日に脱穀作業の後、赤飯で「茂菅農場閉場式」を祝い感謝を捧げる。

表2 「農場」の活動に参加する動機

①教員になるために役立つから	平均値 3.7
②子どもと接したいから	平均値 5.0
③地域の人と交流機会を持ちたいから	平均値 3.5
④活動内容（農作業など）が楽しそうだったから	平均値 4.2
⑤仲の良い友人がいるから	平均値 3.2
⑥その他	平均値 0.3

「子どもと接したいから」であり、回答者60人全員が5段階評価の中で「5」と回答している。一方、「地域の人と交流機会を持ちたいから」の平均値は「3.5」に留まっている。参加時において、学生の地域交流への動機はそれ程高くないことがわかる。

## 4.2 満足度

次に「農場」での活動に対する満足度を、①「非常に満足」②「やや満足」③「不満」④「非常に不満」の中から回答を求めたところ、60人中50人（83.3%）が①「非常に満足」と答えている。活動そのものへの満足度が高いということは、学生の継続的な参加の見込み、すなわち活動の維持にも繋がる。これは地域交流を行う場合において重要な指標と言える。一般的に大学生の活動は活動設立初期においては、自ら立ち上げに加わった学生がほとんどであるため、積極性や満足度も高い。しかし、5年、10年と継続する活動はそれほど多くはないと言われている。まして学生の自発性に基づく活動であれば責任や負担も増す。「農場」が開設から14年目を迎えているということは、学生にいかに高い満足度を与えてきているかということがわかる。

## 5. 地域住民との交流による学生の学び

学生が「農場」での活動を通して、近隣地域の協力者、JAながの営農指導員、そして保護者などの地域住民からどのような学びを得ているのであろうか。

「農場での活動を通して学生が地域住民と交流することは重要だと思いませんか。」という質問に対して①「非常にそう思う」②「まあそう思う」③「あまり思わない」④「まったく思わない」の中から回答を求めたところ、46人（76.6%）が①「非常にそう思う」と答えた。続いて、「地域の協力

者と活動する経験は教員になる上で役に立つと思いますか。」という質問に対して①「非常にそう思う」②「まあそう思う」③「あまり思わない」④「まったく思わない」の中から回答を求めたところ、全体の47人（78.3%）が①「非常にそう思う」と回答している。

また、「どういった点が教員になる上で役に立つと思いますか。」という記述式回答では、大きく分けて3つのタイプの回答が得られた。1つ目は、「地域の方々とのコミュニケーションをとるスキルが身に付く点」、「様々な立場からの関わり方、視点を学ぶことができる。色々な方面からの考え方ができると思う」など、知識や能力の獲得、考え方の変化に関連したもので18人がこのタイプであった。2つ目は、「保護者との接し方を学べた点」、「地域の声、保護者の声を聞くことができる点」など、保護者との関係に関連したもので11人がこのタイプに分類された。3つ目は、「地域の方はとても子どもたちを大切にされていて、私たちが責任を持って子どもたちに接しなければならないという気持ちになれるから」、「教育は学校の中だけで行われているのではないと知った。地域の中にも子どもの学びを支援している人はたくさんいる。そういった人たちの力も借りて教育をしていきたいと考えるようになった」など、学校教育と社会教育に関連したもので20人がこのタイプに分類された。

以上のことから、多くの学生は「農場」で地域住民と交流できること自体が、教員になる上で役立つ経験になると捉えていることが分かる。

## 6. 保護者が子どもを「農場」に参加させる願い

保護者が子どもを「農場」に参加させる願いを調べるために8名の保護者にインタ

ビュー調査を行った。そのうち5名から次の2つの願いが語られた。

(1) 「学校以外の場で大学生のお兄さん、お姉さんとのふれあい体験をさせたい」

保護者A：「長男が年長の時にサッカー体験にぽつんと1人で行かせたんですが、そして中に入っていけないことがあったんです。それで保育園と家だけの生活じゃだめなんだなということを知って、こういう対外的なことができる場所を探してはまして、お友だちから紹介していただきました。長男もお友だちとは普通にできるんですけど、大学生のお兄さんやお姉さんたちとどうやってふれ合っていくのかなっていうことを、私が見たいというか、体験させたいと思いました。」

(2) 「家庭ではできない農作業体験をさせたい」

保護者B：「農作業体験、特に田植えをさせてみたくて、田植えのあの泥の感じとかを足や手で体験させたくて、探していたんですけど、なかなか田植え体験ができる場所ってあんまりなくて、探すのも大変だし、親戚の家に行っても手で植えるってことがないんですね。やっぱりトラクターになっちゃうからうちはだめだよ、って断られちゃう状態だった時に、クラスのお母さんにここを教えてくださいました。今年が初めての参加なんですけど、田植えもそうで、蛙を子どもが触っている姿って今まで見たことがなくて、それを見ることができてすごく嬉しかった。」

## 7. 近隣地域の住民が「農場」に協力する利点

次に近隣地域の住民、林部信造氏が「農場」に協力することにどのような利点を見出しているのかを聞くためにインタビュー調査を行った。その結果、「自分の仕事や活動を学生さんに知ってもらえることができる」、「地

域の若者とふれ合う機会を得ることができる」、「自分たちの地域の将来を担う教員を育て見守る立場になることができる」という答えが返ってきた。また、「農場」での林部氏の貢献に感謝の念を抱いた学生が、林部氏のりんご畑の手伝いを自主的にしていることがわかった。反対に学生が企画した「農場」の活動の中で、田植えの仕方など学生がわからない農作業については、事前に「農場」で林部氏から教わっている様子がわかった。林部氏は自家農園に手伝いに来てくれる学生、毎月1度の活動に参加する学生たちとの関わりが自身の日常生活の一部になっており、自分の人生にまさかこんな楽しみがやってこようとは思わなかった。成長していく学生の姿を見るのが本当にうれしい、と次のように語った。

「最初はね、断ったんだよ。だってもう年だし、信州大学の学生さんを私なんか教えるなんてとてとて。でも、『農場では色んなことをね、人をつくる、作物をつくるということと育てるということが体験できる。農場をやることによって、子どもとふれ合うことができる。お父さんお母さんともふれ合うことができる。それに先生になる時に地域の人と交流する必要があるから今から体験させたい。』って言う土井先生の理念と情熱に共鳴して、協力することに決めて、今日までやってきたんです。うん、もう年(84歳)は強烈にいつてるんだけどね、元気ですよ。信大の学生さんのおかげかな。」

学生は自分たちで企画立案しているからね、私はお手伝いをするだけ。農業をすると応用力がつくんだよ。いつ雨が降るか分からないし、作物は思い通りには育たない。収穫が不十分だから、自分たちで買い足したり、色々考えて準備する。だから見ていると学生がどんどん成長していくのがわかるよ。

あとね、逆に学生にりんごのお手伝いしてもらって助かってるよ。うちの農作業のお手伝いをしてもらっていて、学生のみなさんは都合の良い時間に来て、30分でも1時間でも良いからお手伝いしてもらっている。学生はりんごの花を見たことないし、世話とかも初めてだしね。一緒にやっているんだけど、これは新鮮で楽しいよ。別にこれは大学の単位になるわけでもないからね、あくまでもプライベートで、勉強したいって言う学生が来てくれてるよ。

農場の他に学生と交流する機会はないよ。うん、だから農場の活動は、もう私の生活の一部になってるよ。年賀状もね、もう40枚くらいになるかな、毎年届くし、卒業生の結婚式にも呼ばれたりもするんだよね。今でも長野に来るので「泊めてくれ」って電話してくる卒業生もいるし、なんだか変な気分だよ(笑)。」

## 8. 学生の教職志望度の強化

「農場」での様々な自然体験、社会体験が学生の教職志望度にどの程度の影響を及ぼしているかを明らかにするために、「農場」での活動を通して、教員になりたいという気持ちは変わりましたか」という質問に対して、端的に①「とても強くなった」②「強くなった」③「特に変わらなかった」④「むしろ弱まった」で回答を求めたところ、「農場」の活動を通じて教職志望度が①「とても強くなった」と答えた学生は18人(30.0%)、②「強くなった」と答えた学生は27人(45.0%)、合わせると45人(75.0%)で、4分の3の学生が教職志望度が強くなったと回答している。また④「むしろ弱まった」と答えた学生は1人もいなかった。③「特に変わらなかった」と答えた学生の中には、参加以前から教職志望度が高かった学生も含まれている。これら

のことから教員養成学部の学生が主体となって運営している「農場」には、学生の教職志望度を強化する上で一定の効果が認められる。

## 9. 結論

本研究では、学生、子ども、保護者、そして地域社会の人々の4世代が交流する「信大茂菅ふるさと農場」が、教員養成にどのような効果をもたらしているかを明らかにすることを目的として、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。その結果から明らかになったことは次の通りである。

- (1) アンケートに回答した学生60名全員が、「子どもと接したいから」という動機で「農場」に参加していることが明らかになり、活動から得られた満足感も「子どもと接することができた」ことが最大の要素となっている。
- (2) 学生は「農場」の活動を通して地域住民と交流することは、知識や能力を獲得し、地域の声、保護者の声を聞くことができる重要な場であり、地域住民と交流する経験自体が、教員になる上で役立つと考えている。
- (3) 保護者が子どもを「農場」に参加させる願いとして、学校以外の場で大学生のお兄さん、お姉さんとのふれあいを体験してもらいたい、家庭ではできない農作業体験をさせたいという気持ちがあることがわかった。
- (4) 近隣住民林部信造氏は、「農場」に参加する学生や自家農園に手伝いに来てくれる学生たちとの関わりが自身の日常生活の一部になっており、自分の老後にまさかこんな楽しみがやってこようとは思ってもみなかった。成長していく学生の姿を見るのが本当にうれしい、と語っている。
- (5) 「農場」での様々な自然体験、社会体験

が学生の教職志望度を強化する上で一定の  
効果をもたらしていることが認められる。

**【文献】**

長田侑里子 (2013) 「慶應義塾大学環境情報学部 2012  
年度卒業プロジェクト 大学におけるフレンドシッ

プ事業の地域交流の場としての適性」全65頁  
土井進 (2008) 「『信大茂菅ふるさと農場』10年目の「人  
づくり」戦略—「信大茂菅農業義塾」の開設—」、  
『地域ブランド研究』vol.4、pp.79-96  
土井進編 (2013) 「『信大YOU遊未来』茂菅Farming  
village (13年目)」、『『信大YOU遊未来』の教師教育  
学研究』第19集、pp.12-23

(ながた・ゆりこ)

(どい・すすむ／信州大学教育学部)